

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例郵便物取扱規定第六二七号
令和三年二月一日発行（第百二十四巻第二号）

ホトトギス

二月号



風雅の小筥〔三十七〕

廣太郎

何方でも俳句を詠むにあたり、それぞれ比較的詠み易い季題、反対に詠み難い季題がおりだと思ふ。花等の植物が得意、動物が得意、人事が得意、又反対に苦手という方。今回は、そんな季題の中でもリズミ的に詠み難いという季題について考えてみたい。鋭い方はお氣付きではないかと思ふが、四音の季題である。この稿を認めている十一月を考へてみると「綿虫」や「短日」等がこの部類になるだろう。確かに上五に持つてくる場合は「綿虫」や「短日」等がこの部類になると収まるが、下五になると少し苦しくなつてくる。以前述べた事があるかも知れないが前者を「綿の虫」と詠んだ方が實際いらつしやつた事があり、これはちよつと意味が違つてしまうのではないだろうか。又後者は「日短」として「ひいみじか」と、関西イントネーションで発音されていて、實際歳時記の例句にも掲載されており、市民権を得ているようだ。

そんな中、同じ十一月の季題で「茶の花」が同じ四音であるが、最近この季題を「お茶の花」と詠み、實際句会で選者の特選を得たという事実も伝えられている。確かに一見それほど違和感無く耳に響く事も否定出来ないが、それは「お茶」として親しまれている飲料品としての茶があるからで、植物として詠む時に「お」という丁寧語をつけるのは如何なものだろうか。極端な例ではあるが、これが通ると「お菜の花」「お薔薇の花」等が通つてしまう事になり、明らかに日本語としても違和感がある。詠む人も選をする人も少し考へてみては如何だろうか。

旬日記 汀子

令和二年二月一日 菅屋ホトトギス会

鶯に吉野の旅を近づけし
二月二日 下萌句会

料りたるより白魚となりけり
二の替はねて色街らしき京
廻り来し富士の残雪語らばや
稿債を置いて出掛けん二の替

二月三日 ロイヤル俳壇

寒明や心添はざることもあり
冴返る朝旅立ちて来たりけり
寒明けてより常の日の戻り来し
節分の朝の明るさ身ほとりに
節分と気づきしよりのせらしく

二月四日 大阪倶楽部

立春の日の出見しかと問はれたる
余寒とは心づもりの中にあり
紅梅に庭の竹柵新しく
話題よりはじまつてぬし絵踏かな
傷癒えよ癒えよ余寒をいとはれて
立春と聞きて心に記するもの

二月四日 綿業倶楽部

昨日とは又違ひたる余寒かな
梅二月庭の春秋はじまりぬ
余寒にも心を置きて客まうけ

あなどりてならぬ二月の旅路かな

二月十三日 清交社

梅日和時間の余裕あることも
物忘れせし早春の大事なかな
何か今日時間の余裕暖かし
早春の余裕といへる落とし穴
根を下ろしたるか小さき梅林に
白梅に紅梅に庭人行き来

二月十四日 工業倶楽部

立春を過ぎし安堵の旅支度
予報には従ふ心 春時雨
二月十八日 有恒俳句会

はや消えてぬし薄氷の所在かな
薄氷の消えつまらなき通学路
風強き日の紅梅の香の失せて
朝の間のいつまで続く余寒かな
濃紅梅よりはじまりし日和かな
大小の紅梅遅速なく咲きぬ

二月十八日 無名会

山焼の延期と聞きてある旅路
又延期てふ報せ来て阿蘇野焼
踏まれても踏まれても犬ふぐりの野
太陽に応へし色よ犬ふぐり
この辺りにも春の雪予報出し
手入れせぬ庭の一劃いぬふぐり

会二つ終へたる安堵犬ふぐり

二月十九日 夏潮句会

はやばやと難を飾りて客を待つ
年寄ればこんな表情春寒し
残雪を発ちてこられし人迎ふ
日々癒えよ暖かき日の続くとして
庭の梅大方散りぬ 客案内
春寒くとも明るさに包まるる
行き違ひ又行き違ひ春寒し

二月二十四日 淡路島

すめらぎの悲しみ深し島の春
会場は海の明るさ抱く春
二月二十七日 きざらぎ会

旅先の二月礼者となりしかな
結論を出さねばならぬ冴返る
雨に発ち来て冴返る晴となる
流行の病如何にと冴返る
二月二十八日 時雨句会

又夢に阿蘇の焼野に逢ひし人
なつかしき旅路ふたたび訪ふ焼野
春の風邪とてあなどれぬ日々となる
片栗の花は富良野に尽きざりし
二月二十八日 アネモネ句会

疫病を一喝したしとて雪崩
咲き継いで白にはじまる濃紅梅

廣太郎旬帳

廣太郎

令和二年二月一日 芦屋ホトトギス会

薄氷のぱりと 呷く朝かな
寒椿落ちて大地を和らげる
鶯や六甲の稜線整へて

二月二日 野分会芦屋例会

備前焼買ひ足しもして会陽かな
裸押男のロマン脱ぎ捨てて
裸押びんびんころり願ひつつ

二月二日 青嵐会芦屋例会

針納して俳人となりゆける
針供養背広百本生みし針
館の庭走り根にある余寒かな
こんにやくを錆色に染め針供養

二月三日 カトリック新聞選者吟

初鵬 聖母子像の白見上げ
二月四日 むさし野吟行会

白梅の蕊の長さといふ矜持
一分二分三分梅が香足してゆく
紅梅は溶け白梅は日を弾く
弓川の文字細々と春立ちぬ

二月五日 NHK文化センター

堂の朝追儺の余韻納めゆく
立春の空瑠璃色に明け初むる
白梅の蒼き香りに満つる園
梅が香を風が運びて風が消す

二月六日 蕉心会

大川の波尖らせてゐる余寒
春浅し風は刃となりゆける
銀の波鉄の船余寒

春浅く波白く空淡きかな
航跡を歪めて流れ冴返る
梅が香に整うてゆく館の庭
蒼天に梅の輪郭嵌め込みて
俯いて明日を見てゐる椿かな
蝌蚪の紐命の鼓動轟きて

二月九日 日本伝経俳句協会関東支部大会
冷え冷えと冷えびえとひえびえと春
下萌ゆる学園都市の未来へと
二月十日朝日カルチャー若草句会

下萌ゆる煮くものに先駆けて
下萌ゆる副都心てふ彩りに
縮みつつ春一番を待つ都心
日表といふ下萌の機嫌かな
下萌ゆる地球の寝息確かめて

二月十三日 土筆会
蒼天の色紅梅に明け渡す
二ヶ月の庭園紅と白が占め
六甲の靈氣放ちて初音かな
みよし野の朝鶯と出し巻と

二月十四日 六甲会
パレンティンデーにみやすを予約して
白亜紀の記憶を秘めていぬふぐり
蒼天の端切り取りていぬふぐり
教室にパレンティンの日の孤独

二月十七日 北國文芸選者吟
下萌ゆる病める地球を癒しつつ
二月十九日 カトリック新聞選者吟
初富士に色配りゆく神の筆

二月二十日 前議員旬会
実朝忌虚子の足跡刻む古都
ウイルスを鎮め給へと春時雨

二月二十日 登高会
春時雨余呉湖に命鎮めつつ
白魚の命を放つ綿実油
雨上り香の先駆けて梅見かな
梅見客言葉忘れて来たやうな
大琵琶の端湿らして春時雨
蓋取りて白魚に睨まれし椀

二月二十一日 廣邦会
下萌ゆる宇宙の涯を近づけて
下萌に踏み出す孫の一步かな
薄氷に大地の叫び閉ぢ込めて

二月二十三日 青嵐会東京例会
花粉飛ばす空春光を歪ませて
獺祭して来たやうな犬散歩
雲ひとつ置かぬ天皇誕生日
人寄せて犬寄せて猫逃げて梅

三椏の花の遅速は風が知る
二月二十三日 野分会東京例会
儂さを秘め遅しき春の霜
裸押神のみぞ知る寿命かな
草野球 三塁側の春の霜

二月二十五日 若水旬会
君子蘭傾きにある気品かな
冴返る豪華客船てふ異界
冴返る日本の明日を信じつつ
冴返る度に未来を近づけて

皆顔を隠す都心や冴返る
二月二十六日 目黒学園旬会
獺祭見て来た人とすれ違ふ
黒々と雪間関東ローム層
雪間より日本の生活始まれり

その中に猫の視線や獺祭

雑詠 廣太郎 選

つつましき数に十月桜かな 東京 山田閨子
 虚子のこと子規に聞きたし癩祭忌 同
 音域を違へて鳴ける昼の虫 同
 控へ目にして三日月の存在感 宝塚 水田むつみ
 待宵へ飛び立ちさうな白鷺城 同
 月の名を追ふみほとりの旅靴 同
 古き世のホトトギスより秋の声 神戸 藤井啓子
 こころ駆け足はもつる運動会 同
 ばつた飛ぶ古墳といふも草つばら 同
 火入れ式より幽玄の月上る 同 和田華凜
 しづしづと月下にシテの歩みかな 同
 月天心 篝火果てて能果てて 同
 露寒を横川日和として忌日 西宮 海輪久子
 虚子知らぬことが露けくする忌日 同
 露の塔虚子ふと近くふと遠し 同
 蚯蚓鳴く己が姿を嘆くかに 袋井 湖東紀子
 豊かなる土を喜び蚯蚓鳴く 同
 冷房の中に暮して空を見ず 同

無花果の皿に割れたる画室かな 東京 田丸千種
 栗おこは海幸彦へおすそ分け 同
 栗ご飯丹波田舎の代名詞 同
 はじめから逃ぐる算段稲雀 奈良 古賀しぐれ
 古代への入口霧の朱雀門 同
 灯下親し句集のあなた語りくる 同
 土地人の手順に倣ひきりたんぼ 東京 高濱朋子
 又届く訃音に黙しそぞろ寒 同
 宵闇に仄と浮みし影二人 同
 晩年も炎天もわが肩の上に 熊本 岩岡中正
 耐へるほかなきウイルスも台風も 同
 文学をせよと秋風吹いてくる 同
 箒手に僧現れし野分跡 長岡 安原 葉
 妙 高の風の彩る唐辛 同
 一人旅バナナ一本買ふことも 同
 看取る汗心の底の涙かな 福知山 松山牧子
 浄土への旅路安かれ露しぐれ 同
 ただじつと写真と語る秋の夜半 同
 かなかなや図書室の灯の足されたる 同
 くれなゐは秘めたる想ひ椿の実 同
 真実はひかりとなりぬ稲の花 同
 秋冷に降り立ち風の声を聴く 神戸 涌羅由美
 日に透ける赤は血潮よ照紅葉 同
 空は青海は藍へと秋気満つ 同

雑詠句評（一月号より）

日盛を歩く日課も老の意気 相摸原 木村享史

心にも青空欲しき窓の秋 福知山 松山牧子

職場から第一線を退いた年配者が日常の健康管理の為に朝夕にウォーキングを楽しむ姿が多くみられる。個人で単独の行動もあれば仲間と一緒に歩く会を結成してお互いに励ましあつて活動しておられる会もある。

作者も健康管理の為に毎日歩いている様子であるが、「日盛を歩く」とあるので余程強い決心をしておられるのであろう。

日中は強い日差しが心配であるが、そこはおそらく配慮して木陰や建物の影を選択して歩いておられるのであろう。もし不慮の事故に遭遇した時には、世間の目が多くあるので夜間よりも安全かもしれない。意気込みだけでは適わない事故も起こることを考慮して安全に歩かれることを祈りたい。（静龍）

夏の暑い時は何をするのも億劫になり、太陽のざらざら照り付ける真昼の炎天下は体にも良くないだろう。そんな中でも歩く事を日課にされている作者である。確かに軽い運動は健康にも良いだろう。そんなリズムを崩さない生活によって健やかな人生を歩んでおられる作者なのである。（廣太郎）

作者の夫君、松山ひとし様が本年八月九日、八十五歳の生涯もつて逝去された事に対し、先ずもつてここに、謹んで哀悼の意を表します。ご生前は毎年、北近畿ホトトギス俳句大会の世話をして下され、また全国各地のホトトギス俳句大会などにお揃いで参加され、ひとし様に寄り添つて歩行を助けておられた作者の姿が懐かしく思い出されるのである。この句は、ひとし様を看病しながら詠まれた句かとも思われるが、「心にも青空欲しき」という素晴らしい措辞によつて作者の心情が読む側にもいたく響いてくる、心持の深い句である。（葉）

秋は澄んだ水や澄んだ空気で一年中の中最も爽やかで気候が良い季節であるが、冬も近い事もあつてか何か物悲しい気持にもなるものである。作者は最愛の御主人を亡くされて、そんな季節でも心は晴れないのだ。窓越しに秋の空を眺めて、心を癒されている気持がしみじみと伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

子選

一年に一度反省する子規忌
 子規祀る子規に問ひたきこと一つ
 若芝の輝く園に人居らざ
 百千鳥希望の楽として聴けば
 一眠りしてしまひたる夜長かな
 湖よりの風心地よき花野かな
 炎帝の掴みかかつて来るに耐へ
 羨ましがられて夏の好きなる老
 芭蕉深閑として水流れゆく
 カンナ燃ゆふるさとつひに捨てられず
 焼く茸汁の茸と分けてゆく
 食ふうちに笑ひ出したるきのこ鍋
 虫の音を風に聴きたく荒野まで
 落ちてゆく鮎らし流さるるままに
 妻遺す蔵書繙く長き夜
 さう云へば夜なべの多き妻なりし
 木戸押せば木屋の香に包まるる
 次の間は何も置かずに萩芒

東京 今井千鶴子
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 相模原 木村享史
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 三村純也
 同
 神戸 山西商平
 同
 東京 河野昭彦
 同
 鎌倉 星野 椿
 同

貼り替へし障子と判る響きかな
 踏み込んでなほ踏み込んで落葉籠
 一夜さの潮騒の宿月の友
 露踏み朝の一步のつつがなく
 曾爾に来てあやさん思ふ芒原
 曾爾高原霧の芒となりゆける
 朝露の万華鏡めく狭庭かな
 別れ際芒かくれに手を振る子
 先づ窓を開けてみる朝爽やかに
 天高しちよつと会はねば背丈伸び
 門火焚く仮設に住まふお婆らと
 盆僧へアルプスの水おもてなし
 収穫を終へし大地の草紅葉
 吹かれても風と親しむ秋桜
 山頂へ露の一步を重ねゆく
 露草に露草程の命かな
 月の道一步一步に迷ひなし
 貴船菊照すこの世の片隅を

淡路島 高田非路
 同
 東京 山田閨子
 同
 宇治 西村やすし
 同
 東京 笹倉 潤
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 横浜 小坏律夫
 同
 袋井 湖東紀子
 同
 神戸 和田華凜
 同